

第一章 はじめに

本書は、室町時代に三条西家の源氏物語本文がどのようにして形成されていったのかを、現存諸本の書誌や本文状況、各種日記、注釈書といった諸方面から多角的に分析し、体系的に跡づけようとしたものである。

源氏物語が成立してから既に千年以上もの歳月が流れ、その間この作品は様々な人々によって書き写され、伝えられ、研究されてきたわけなのだが、永い享受の歴史の中で稿者がなぜ室町時代を取り上げるのか、しかも同じ室町時代に書写された大島本や明融臨模本といった本文ではなく、三条西家の本文をとりあげようとするのかについて、はじめに少々説明しておきたい。

結論を先にいえば、今日活字化されている源氏物語の本文は、その大半が青表紙本、就中大島本を底本とした校訂本文であり、新たに付された注釈もまたこの大島本に基づいている。それと呼応することく、源氏物語の読者もまた、研究者も含めた大半がこの大島本で源氏物語を読んでいる。かかる今日の源氏物語享受の様相は、言うなれば、大島本でほぼ平準化されてしまった世界といえるかもしれない。^{注1}無論、平準化されたことそれ自体には、功罪両面が含まれよう。とはいえ歴史的事実としての源氏物語の本文世界は、もっと多様で豊潤だったはずである。そういう視点からいえば、平準化された現状というものは、本文研究としては活力の喪失を意味しているように思う。しかし果たしてそれでいいのだろうか。問題はすべて解決されているのだろうか。いや、それどころが実際は、袋小路に陥っ

とあり（中略）。現存の三条西家証本源氏物語は、山脇穀氏の精密な研究によれば、肖柏本などを借覽し、実隆が桐壺の巻を書き、他はその子公条をして書き継がせたものである。右日高氏蔵本によれば、実隆の書写した本があり、その本文はなほ純粹な青表紙本の特性を伝へてゐたが、公条の書写した現在の三条西家本には既に河内本との混成が生じてゐる。三条西家本におけるこのやうな例は五十四帖中いたるところに見られ、この本を以て青表紙本の証本とすることは甚だ危険と言はなければならない。

〔大成〕七七―七八頁

この解説に対して稿者が不審に思うのは以下の三点である。第一に、大島本も訂正によって青表紙本になったが、もともとの本行は河内本ではないかということ。第二に、三条西家の注釈書をみると『弄花抄』『細流抄』『明星抄』一貫して、当該注を立項しており、その見出語は「けしきはかり」で統一されている。これは三条西家の人々が、定家本が「はかり」だったことを了解していたということである。青表紙本を標榜して、定家本は「はかり」と認識していたにもかかわらず、なぜ三条西証本（日大本）は、「ことに」を「はかり」に訂正しなかったのだろうかということ。稿者にはむしろその方が疑問であつた。第三に、池田氏がいうところの「日高氏蔵の古写本」だが、その奥書をみる限り、これもまた三条西家本といえる。しかもその本文には「はかり」とあつて「なほ純粹な青表紙本の特性を伝へてゐた」という。そうした三条西家本が日大本になると、どうして変わってしまったのか。

一方、この異同例については伊井春樹氏も言及していた。同氏の場合はむしろ大島本の動きに注目しており、「ことに」を「はかり」に訂正してある本文の様態を、後人の書入れによって河内本から青表紙本に訂正されたものと解されたのだつた。つまりこのくだりについていえば、底本は非青表紙本であり、それを系列の異なる本文で訂正したということになる。伊井氏によれば、大島本にはこうした例が多く、加えて校合本もまた純正な青表紙本に限ったわけではないという。そして、最後に次のようにまとめている。

大島本の依拠した本文そのものも、河内本的な要素を持つていたようだが、後に校合書き入れに用いた本文も純正な青表紙本ではなかったとなると、そのようにしてできあがつた本文は、一体どのような性格になるのであるか。江戸期になつての大島本への数次にわたる改訂作業は、確かに当時流布した青表紙本に近づいたし、洗練された読みやすい本文に変貌していきはしたが、それでは雅康の依拠した当初の本文は不純だったのかということになるし、校合に用いた本文は非青表紙本の要素も持つていただけに、河内本と接近したり、他本には見られない独自の孤立した本文も作り出してしまった。かといって墨や朱などによって訂正された本文を一切排除し、本来の大島本を復元するのがよいかとなると、すでに述べたように誤脱や誤写が多すぎ、とても読めるような本文ではなくってしまう。このような状況だけに、最終段階の大島本の本文をもつて青表紙本の基準とするのはきわめて危険であるし、青表紙本の中でもこれと対置する三条西家本を含めて、定家本とはどのような本文だったのかを、あらためて体系的に考察する時期にきているのではないかと思う。^{注5)}

源氏物語の本文研究には、文化遺産とも言うべき膨大な蓄積があり、池田文献学もそのなかの確かな一歩である。だがその池田文献学が最善本と定位した大島本にも、このような問題があつたということである。

ではこれから先、本文研究はどの方向に進んでいったらいいのだろうか。確信がもてず途方に暮れた気持ちにもなるが、こういうときは出来ることから始めるべきだろう。永い歴史をもつ源氏物語には、それぞれの時代を背景として様々な事情の許に生み出された本文があり、その一つ一つが実際に享受されてきたものだという厳然たる事実があ

る。この基本に立ち戻って、大島本以外の本文にも眼をむけてみようと思った次第である。そこで、同じ青表紙本系でも定家本・明融本・大島本といった本文グループと若干異なることとされてきた三条西家の本文^{注6}、池田氏によって「青表紙本と称しながら、多分に河内本本文を混ぜしめてみた」と評された、この三条西家の源氏物語本文を取り上げてみることにした。同本については稿者はこれまでに、明融本や覚勝院抄等の調査から何度か扱ったことがあり、池田文献学のいう三条西家本とは重ならない部分のあることも感じてきた。そこで、もう一度整理し直してみたら何が見えるか、本書で挑戦してみるつもりである。

以下この第一部では、室町時代における源氏物語享受の特色を押さえ、次にこの時代における本文史の具体相を確認するところから始めていきたい。

第二章 室町時代における源氏物語享受の特色

室町時代の文化と云えば、足利義満の北山文化や義政の東山文化が思い浮かぶ。寝殿造りに代わって書院造りが誕生し、禅宗の導入によって五山文学が起り、和歌から派生した連歌が流行する等、この時代は政治面のみならず文化面に於いても武家を初めとする新興勢力が公家を圧倒し始めた感が強い。加えて能・狂言・御伽草子といった庶民文化も台頭しはじめていた時期である。こうしたなかにあつて、王朝時代に作られた源氏物語は古びた遺物として時代の片隅に追いやられていたのかといえは、まったく別である。

たとえば、室町前期の応永二十六年（一四一九）五月、伏見宮貞成親王は源氏物語の知識が無いことを羞じ、側近を集めて源氏読みを始めた。『看聞御記』によれば、

六日晴。抑源氏無才学之間。自桐壺次第読之。女中。長資朝臣張行也。重有朝臣読之。毎日読之間。駄餉等可為順事^{注7}云々。：

とある。その後の記事を追ってゆくと、源氏の揃い本が無かったので途中から行豊朝臣本を借りて読み進めることもあったようだが（同年五月二十日）、やがて朝廷から「結構」な揃い本五十四帖が預け下されたとある（永享五年七月二十四日・同六年八月十八日）。この揃い本については、後に一条兼良が校合のため借用を申し込んだようである（嘉吉三年八月二十三日）。